

令和7年度 第2回社会教育委員会議 議事録

第2回会議では、各委員の活動を「かかわりあい」「まじりあい」「まなびあい」の視点に沿ってより深く掘り下げるとともに、同じような課題を抱えているであろう委員とグループをつくり、協議しました。

【学校教育班】

※ 幼保連携こども園・学校教育関係者の委員のグループ。

発言者	発言内容
委員	<p>再編・統合に向けた校則検討について。</p> <p>徐々に解決していった結果、要望がほとんど挙がってこなかった。猛暑対策の服装など、「調べなさい。」と投げかけてみた。全校生徒の当事者意識が高まった。</p> <p>見知っている情報で、具体的に考えられるものであれば意見が出る。新たな課題を見出すには、新たな知見が必要である。今後も続いていけばよいと思うけれど。</p>
委員	<p>産前・産後のケアから児童発達支援、児童クラブ、剣道の指導、有料老人ホームなど、幅広くかかっている。地域の人、高齢者クラブの人たちとのかかわりもあるが、自治体とのかかわりは制度的に難しいこともある。</p> <p>個人の尊厳を大切にすること。「まじりあい」では大切にしている。</p> <p>インクルーシブ教育に力を入れている。特性のある子どもも、基本的には一緒に活動し、何か落ち着く必要があるときは別室に…というようにしていると、他の子どもたちが本当に支えてくれる。そういう意味では「まなびあい」ができていていると思うが、これがどう繋がっていくのか、広がっていくのかというところを考えなければならない。他の園では、発達障がいを抱える子どもなどを完全に切り離しているところもある。そういう園にもインクルーシブの考え方を広めていくにはどうすればよいか考えている。</p> <p>できるだけ乳幼児期にウェルビーイングを感じれば、その子どもたちが大きくなったときにそういう社会をつくっていくのではないかと思う。</p>
委員	<p>福祉教育の推進に取り組んでいる。</p> <p>自ら気づき、考え、行動する…、そういう子どもを育てたいと思ってやっている。</p> <p>民生・児童委員の会長さんを窓口として、障がいのある方とのふれあいの機会を設けている。その他にも疑似体験等も行っている。「かかわりあい」はしているものの、普段の生活に活かされていないような気がする。特性を理解するだとか、障がいのある方の困り感を思いやるとか、かかわりあうだけでは気付かないことがある。</p>
委員	<p>道徳教育の充実も大事なのではないか。理解も大事だけれど、子どもたち自身の「気づき」を促すことが授業の中ではできていないのかもしれない。</p>
委員	<p>地域の人たちに「学び」を発信して評価してもらうような取組も必要なのではないかと考える。</p>
委員	<p>教育課程外の活動について。</p> <p>地域のNPO団体と繋がって、高鍋駅周辺の活性化に取り組んでいる。地域に関心をもって、学年・学科、学校をも超えた集団で活動していることは、かかわりあい・まじ</p>

	<p>りあいにあたると思う。</p> <p>学び合いの成果として、働く大人の姿を間近に見られたことがよかったのではないかと思う。子どもたちにとって身近な働く大人のロールモデルとえば、親か学校の先生くらいしかいない環境で、様々な大人の姿を見ることができ、職業観が豊かになったと思う。地域で働く大人の姿に魅力を感じられれば、地域で活躍する大人になってくれるのではないかと思う。</p>
議長	<p>「地域があって、子どもがいるから、学校がある。」という原点に立ち返らないと、学校はいずれ立ちゆかなくなる。</p>
委員	<p>幼児期の現状だが、子どもたちを育てながら小学校に繋げていかなければならない。自分の園の経営も考えなければならぬとなると、子どもの奪い合いになっていくのではないかと感じる。自治体と連携し、地域のためにみんなで手を取りあっていく必要がある。</p>
委員	<p>小学校は割と地域と連携できているように思う。意見交換の機会や小学校入学前の相談、見学もある。また、学校運営協議会でもいろいろな意見をもらっている。ただしそこに幼稚園・保育園の先生は入っていない。</p>
委員	<p>特性のある子どもの支援について。</p> <p>幼少期より丁寧に手を掛けてもらっている子どもたちは、学校でも落ち着いている。幼稚園・保育園にもがんばってほしい。ある程度自我が芽生えてからでは、支援の難しさが感じられる場面もある。</p>
委員	<p>コロナ禍を経て、人との関わりが足りなかった・遊んでいない世代について。</p> <p>「我慢して譲った」というような経験、仲間の言葉を聞いて嬉しかったり悔しかったりといった体験が少ないように思う。たくさんの人に関わってもらった子どもは幸せ。不登校の多さの一因になっているように感じる。</p>
委員	<p>悩み事の相談がSNSになってしまって、身近な人に相談する習慣がない。また、困ったことを自分たちでは解決することに困難がある。</p>
委員	<p>親世代の繋がりも希薄になっているように思う。参観に来て話もせず帰って行く。PTAバレーのようなことがないと、人の顔が分からない。</p>
委員	<p>必要な行事をカットしすぎた。</p>
委員	<p>きっかけ作り大事。</p>
委員	<p>前任校のときは目の前に田んぼがあって、高校生と小学生がまじりあって田植えをしていた。小学生を高校生が手助けするところがよかった。体験こそさせないといけない。自分たちで育てたものを使った調理など。</p>
委員	<p>異学年集団で混じり合うことができるとよい。</p>

【社会・家庭教育A班】

※ 主に地域で「かかわりあい」の場を創出したり、地域学校協働活動に参画したりしている委員のグループ。

発言者	発言内容
委員	<p>※サポ・プロトレーナーとして、英語教室の経営者としての知見を話します。</p> <p>サポ・プロについては、「かかわりあい」の場面しか創出できていない。参加者がもう少し増えたらと思う。構えて行くのではなく、気軽に参加できるような「かかわりあい」の場になればよいと考えている。</p> <p>英語教室では、ハロウィンイベントを企画している。これが「かかわりあい」の場になると思う。そこで顔を合わせた子どもと、イベント以外の場面でもかかわれるようになったらよいと思う。</p> <p>日本語の表現力に問題を感じている。短い文に慣れていることや、読書量が少なくなっていることが原因ではないかと思う。</p> <p>※) みやざき家庭教育サポートプログラム</p>
委員	<p>「かかわりあい」と「まじりあい」で終わっている感じがある。「まなびあい」がないわけではないが、この場を離れてもそれが実現されているか分からない。</p> <p>教員を志望している学生も来るが、実際に教員になりたいと考えている学生は少ない。子どもたちと接して、ぜひ教員になってほしい。子供と接する良さを学んでほしいと思う。</p> <p>かかわりあい・まじりあい・まなびあいを系統立てて実施しているわけではなく、境目が難しい。</p> <p>自治公民館長の経験から言うと、地域の行事でかかわりあい・まじりあいまでは達成できていると思うので、「まなびあい」で「防災」「避難」まで活動を広げたい。特に、地域に高齢者が多いので、「備える」というところにもっていきたい。</p>
委員	<p>見守り活動をしている。小学生に比べると中学生の方があいさつする。上級生があいさつすると下級生もあいさつする。「まなびあい」がそこにあると思う。</p> <p>公民館長もしているが、ごみ集積場の状況を見て回っていると、草取りをしている人がいた。花が植えてあることもあった。敬老会で紹介した。広がるといい。</p>
委員	<p>地区にある4つの学校(小学校3・中学校1)の支援本部がまちづくり協議会になっている。</p> <p>心のプレゼント運動(あいさつをしよう、人に親切にしよう、といったことを呼びかける運動)をしており、のぼり旗・看板を設置している。町のいたるところに設置しているので、必ず目に入る状況。その効果か、子どもたちはかなりあいさつをする。学校側からは、持久走の立ち番、餅つきの手伝い、面接練習などに協力要請がある。一方的に支援するだけでなく、ふるさと祭りなどには児童・生徒が積極的に協力してくれる。展示パネルの設置など、力の要る作業については中学生がよくボランティアしてくれる。</p> <p>史跡巡りや面接練習に協力要請があった際は、そのことについて勉強しなければなら</p>

	<p>ないという意識がこちら側にも芽生える。</p>
委員	<p>地域婦人連合では、80歳前後が一番元気な世代。「日本のひなたでつなぐ」を合言葉に頑張っているところ。</p> <p>花のまちづくり運動に取り組んでいるが、これは健康づくりにも環境美化にもなる。いくつかの効果が期待できる取組である。</p> <p>コロナ禍の際、自分の家に花を植えることを始めた。フジバカマという花だが、この花にアサギマダラという蝶が集まる。地域みんながフジバカマを育てるようになり、スマホで「自分のところにもアサギマダラが来た。」というようなやり取りをすることも増えた。「苗をください」という人も増えた。</p> <p>学校の校長先生にお願いして、植栽してもらっている。花の様子を見ることも増えたが、見られる側も、「自分の家をきれいにしておかなきゃね…」という気持ちになる。これが環境美化につながっている。花を見て歩く中で仲良くなった人もいる。しょっちゅう庭に出るようになるので、健康づくりにもよい。写真を撮って町の文化祭に展示している。その展示作品を見て、「あなたのところにも来ているんだね。」と散歩コースに加える人もいる。</p>
事務局	<p>「まなびあい」の部分をどう発展させていけばよいか、公民館への加入率を上げるためにはどうすればよいかということが話題にあがっていた。</p>
委員	<p>学校の教員になりたい人の割合が少ないのも気になる。学校って子どもにとって特別な場所であってほしい。どうしたらそういう場にできるのか。</p>

【社会・家庭教育B班】

※ 主に障がいの有無や国籍、性別等に関係なく、互いを認め合う社会を形成するために活動している委員のグループ。

発言者	発言内容
委員	<p>「食」を起点としたウェルビーイングの実現に取り組んでいる。</p> <p>今まさに乗(3Lサイズ)の時期だが、3年ぶりの大豊作。お裾分け文化が根付いており、これが「かかわりあい」の場面になるのではないかと思う。学校・地域で連携している。また、新しい調理方法も模索しており、これは「まなびあい」の場面と捉えられるかもしれない。独居高齢者も多いので、支え合いの場面がよく見られる。学校には空き教室も食器もたくさんある。お招きして支え合いができる。給食センターも3カ所あり、環境的にも恵まれている。地域に根差したウェルビーイングが実現できれば、それが宮崎に根差したウェルビーイングにもつながっていくのでは。</p>
委員	<p>性同一性障がいの当事者として、講演会をよく行うが、こちらが一方向的に話すだけになる傾向にある。かかわりあえなくもないが、個別相談的なもので終わってしまう。</p> <p>全てのことには「性」が繋がっているのでは。「性」のことはタブー視されることがあるが、正しい性教育の必要性を感じる。</p> <p>「体が男性、心が女性」という形のトランスジェンダーに対する偏見が一番多い。なぜなら「男のくせに」という意識があるから。一方、体が女性で心が男性の場合は、「男の子っぽくて活発でかっこいい」という認識になる。これはトランスジェンダーに対する偏見というよりは、男女に対する偏見が根底にあるのではないかと思う。</p> <p>男女の違いを分かりあえたときに「かかわりあい」「まじりあい」「まなびあい」ができるのではないか。</p>
委員	<p>かぎ針編み教室を開設している。講師を務めているのは、感覚過敏や人混みの苦手さなど、辛さも経験している方である。教える立場としてどう人と関わっていくかを協力して模索しているところである。講師は、地域の方の協力を得て9月から自分の会社を立ち上げている。作品も売れている。</p> <p>その子を小さい頃から知っている人が教室を開いてくれるなどして協力者になってくれている。苦手なこともたくさんあると思うが、小規模であったとしても、得意なことや好きなことを活かして生きていけたら良いと思う。</p>
委員	<p>宮崎に根差したウェルビーイングの前提として、「善良な心」をもっていることが必要ではないか。法というのは、基本的に、良い使い方をしてくれるだろうという性善説的な考えで運用しているが、法の目をかいくぐって、悪く使おうとする人もいる。道徳教育を充実させることも大切なのではないか。地域活動などに協力してくれる方々は素晴らしいと思うが、そういう人ばかりではない。</p> <p>まず「善良な心」がないとウェルビーイングは達成されないのではないか。</p>

事務局	<p>ここまでの話だと、正しい知識と善良な心が必要なように感じる。</p> <p>美郷町が地域で盛り上がるができるのは、「お互いについてよく知っている」「受け入れる」土壌が既にできているからかもしれない。雑多な人が集まるコミュニティでは、まず「かかわりあい」を生むこと自体が難しく、培うものが違うのかもしれない。</p>
委員	<p>自分が子どもの頃は、男子・女子、どちらに入ることも辛かった。誰もが地域とか自治体とかに積極的に参加できることが理想だが、事情があってそれが苦しい人もいるということは知っておいてほしい。</p>
委員	<p>私たちの思い込みや「よかれ」と思ってやっていることは、実は間違っているのかもしれない。話すことが大事。</p>
委員	<p>学校で講演をすると、いやでも聞かないといけない。でも、そこに来る人はある程度知識や理解がある人が多い。</p>
委員	<p>この間、公立大で「デフカフェ」という事業をしていた。耳が聞こえない人と一緒にお茶を飲みながらコミュニケーションするイベントだったが、耳が聞こえなくても一緒に会話を楽しむことができる。そういった「場」がまず必要。関わらないと分からない。委員の主宰する団体では、パン作り教室を開催していると伺った。それなら障がいに関心のある人だけでなく、パン作りに関心のある人も来る。いろいろな人と交わるきっかけになる。</p>
委員	<p>障がいのあるなしにかかわらず、人が集まるきっかけ作りをしている。</p> <p>ただ、本当に来てほしい人へ届かないのが課題。</p>
委員	<p>相談できないからそういう状況に「なってしまってる」人もいる。誰か相談できる人がいればよいが。</p>
事務局	<p>「場」づくりが課題。</p>
委員	<p>先程道徳教育について触れていたが、社会に出てしまうともう自由なので、学校教育が正しく教育する最後の機会。</p>
委員	<p>やはり感覚として身に付けないといけない。</p>
委員	<p>性の問題については、学校教育に入ってから教育では既に遅い気がしている。当事者からすると、保育園の行事で、「男の子は〇〇、女の子は〇〇」というようにくくられることが既に違和感だったようだ。幼いながらに自分のことを「男の子だ」と思っているから、男の子チームの出し物に出してくれるよう交渉したが、それは叶わなかった。このような経験をとおして、「自分は女の子なんだ、交渉してもダメなんだ」ということを思い知らされる。発達障がいのある方々も、幼稚園・保育園で既に「自分は周りとなにか違う」ということを自覚させられ、辛い思いをしてきたようだ。小学校に入って「はい、道徳」と言われても、根付いてしまっているものがある。幼稚園・保育園からの教育が大事。上の世代の価値観を変えるのは難しい。</p>
事務局	<p>幼・保・小連携が大事だと感じる。</p>
委員	<p>社会全体がラベリング無しに生きているようになっていかななくてはならない。</p>

委員	<p>専門的な知識も大事だけど、地域で共生社会をつくっていけるようにする必要がある。</p> <p>勉強してくれる人が増えて、逆に「一緒に」でなく、「それは福祉サービスで…」といったように断られることも増えた。</p>
委員	<p>障がい者雇用についても、「定数を雇用しているからよいだろう」というような捉えになり、本当に一人一人の働きやすさに繋がっているか分からない。</p>
事務局	<p>「まじりあい」の場をどうやって作っていかうかというところが課題であるように感じた。</p> <p>当事者の人たちの話を聞きたい。何がその人にフィットしているのか。</p> <p>感覚として身に付けさせたいという話が出たが、保育園、あるいはそれ以上前から身に付けさせるとなると、地域のコミュニティーが大事になってくるのではないか。地域のコミュニティーができていないと、もう「感覚」として身に付ける場は教育課程に入ってからしか得られない。そうすると「知識」として身に付けるしかなくなってくる。</p> <p>今、地域のコミュニティーが作りづらくなっている。どんな人がいて、どんな個性があって…ということが分からない。</p> <p>先日、地域に外国の方が増えているということが話題に上がった。仲良くなりたい気持ちはあるが、「怖い」気がする。なぜ怖いのか、それは互いのことを知らないからだと思う。やはり、話して、「知る」ことが大事。</p> <p>その「知る」の拠点をどこにするか、地域のコミュニティーを復活させる核をどこにするか…。「公民館」などがよいのではないかと思う。</p> <p>そういうコミュニティーが自然とできていると、「みんなで何かしよう。」や、「それだったらあの人が知ってるよ。」などがやりやすい。楽しい方に発展していける。</p>
委員	<p>「世の中 いい人ばかりではない」ということを聞いて、「もっともだな、前回提言をしたときは、そこまで考えていなかったな。」と思った。</p>